

# WATCH the NEWS

## ◆ATOMIC SWING INTERVIEW

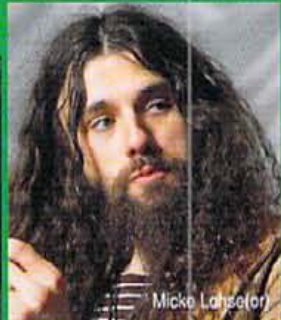
### 1枚のアルバムでスウェーデンを変えた異色バンド。ソールドアウトとなった日本公演での素顔とは。



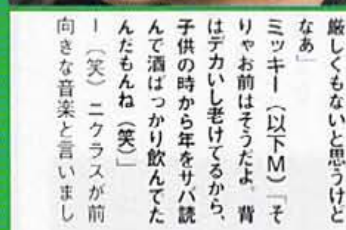
Peter Dahlstrom(b)



Niclas Frisk(vo.g)



Henrik Berglund(ds)



Micke Larsson(g)

流行りの音や理屈ばかりのロックに今、敢えて挑戦状を叩きつけるかの如く新鮮に響くATOMIC SWING G。アメリカでなければイギリスでもない、この白夜の国出身の4人組は、デビュー曲「STONE ME INTO THE GROOVE」を本国チャート1位に送り込み、次いで1stアルバムでいきなりゴールドディスク獲得という記録のスピードでサクセスを手に入れた。今回の初来日でも新人とは思えぬ異常人気ぶり。イメージ的に気難しそうなところの予想を裏切って、素顔の彼らは全く素朴でせんぜん陽気。おまけに全員が大の酒好きときて、始終飲む話に行ってしまうのだった!

「こんなに早く成功すると思った? ニクラス(以下N)「いや全然。かなり驚いたよ。でもロックミュージシャンで有名になったからって別にヒーローになつた訳じゃないしね。自分達の音にはまだ満足してないし、これからは有名になつたらなつたで失っていかねばならないものも多いと思う。でもそれを差し引いても、今現在のこの状況を楽しんでるんだ」

#### 若者の自殺が多い国。

「スウェーデンといえは福祉国家で恵まれてる一方、飲酒の規制など厳しい一面もあるようですが、現在の若いひと達をめぐるとはどんな様子ですか?」

N「スカンジナビア辺りでは、社会情勢が悪いこともあって若者の自殺率が非常に高いんだ。だから音楽がそのはけ口になつてることが多い。前向きな音楽で現実を忘れるためにね」

「ビーター(以下P)「田舎よりも逆に大都市の方が、影響を受けたり左右するものが多い。若者にとっては気持ち発散しにくいかもしれないね。でも飲酒に関しては、スウェーデンってそんなに厳しくもないと思うけどなあ」

「ミッキー(以下M)「そりやお前はそうだよ。背はデカいし老けてるから、子供の時から年をサバ読んで酒ばかり飲んでたんだもんね(笑)」

「ニコラス(以下N)「ニコラスが前向きな音楽と言いまし



たが、でもニクラス自身が書く詞には逃避願望があるというか、悲観的なものが多いような気がするんですけど。N「なるべく明るい曲を書こうとするんだけど、暗い曲を書いた方が逆に気分が明るくなるって、感じたことを書いてるだけだよ」

「作詞家ニクラスを皆どう思います?」

M「いや実に悲劇的だ(笑)」

N「ヘンリック(以下H)「暗いねえ(笑)」

P「おい、正直に言えよ。俺、耳ふさいでやるから(笑)」

P「(笑) いや冗談。すこしいいよ、気に入らなかつたわとくに文句言ってる」

「成功して精神的に変わった? 得たもの、または失くしたものは何ですか?」

N「1番変わったのは女の子にもてるようになったことかな。もうホント幸せ。あ、これ書かないでよ(笑)。得たものといえは生活するお金、失ったものは人から見られることなく人を観察するチャンスかな」



「カー・クラッシュ・イン・ザ・ブルー」/2,500円/ポリドール

N「古めかしい音が欲しいんだ。ウイングのね。それにニューオリンスには「アブサン」って強いお酒があるんだよ、知ってる? だから行くのさ(笑)」

「ほんつにお酒が好きね」

N「スウェーデンじゃ酒は文化のひとつなんだよ。つまりお酒をたくさん飲むのは大人の証しだってこと。それで僕らもベストを尽くしてるんだよ(笑)。だから君がスウェーデンに来たら、バーなんかで飲みすぎてハタハタと倒れる人間を大勢見るだろうけど、まあ気にしないでね(笑)」

「はあ……そうですか?」

N「ねえ、でも僕ら普段はそんなに飲まないよ! 仕事する時はよく飲むけど」

「仕事の時だけ飲む?」

M「スカンジナビアの人間は昔からよく飲むんだよ。でも僕らには出ないんだ。内面からジワジワとハイになるのさ」

N「それに達らの場合、飲むことによつてミュージシャンとしてのアーティステックなオーラを出してるんだ。だから飲まなきゃいけないの。大変なんだよこれ」

「……今も相当飲んでるんじゃないの?」

P「君が(ニクラスを)蹴っとはして見たらわかるんじゃない? (笑)」

取材・文/木村紀子  
通訳/宇井千史  
撮影/HARRY'S EYE  
協力/ポリドール株式会社、  
クラブフロート、  
クリエイティブマン・プロダクション





◆有近真澄INTERVIEW

トキヨウの夜の  
マルチェロ・マストロヤニ

窪田晴男プロデューズによるニュー

真澄。小西康陽、S-I-K-E-N、O-T-O、星野鉄郎、森雪之丞ら豪華作詞、作曲陣を迎えたこの作品には、イメージが極端なまでに増幅、拡大された甘く危険な男、の世界が渦巻く。このクラブで、ニューミュージックな、ありそうでなかった大人の音のするアルバムについてインタビュー。

「前作『トウル・ブルー』はブルーがキーワードで今回は赤のジャケットですね。

「前は曲調がポップではあれ、静かなイメージだったんですけど、今回取り敢えず動いている姿というが、各調のイメージまで走って行くという自分の姿、という気持ちはありますね。」

「窪田さんのプロデューサー起用は？」  
「彼とは18、19歳の頃からの友達なんだけど、それこそ10年に3回くらいしか会わないという(笑)。今回の仕事で会った時に直感が出て、それでプロデュースを頼んだんです。色々話し合った結果、彼いわくファンキーで女絡みでアクトイフでハンサム、で笑える(笑)というコンセプトになりました。音的にはちょっと黒っぽいファンキーな仕上がりでですね。」

「アルバム作りはそんなギョウクター作りから入ったという感じですか？」  
「非日常であれ、僕が歌うということ、その役のリアリティーを感じるといところで窪田君は僕に役者的なイメージを感じたみたい。」  
「そのキャラクターとしてマル

チェロ・マストロヤニのイメージがありましてタイトルの「女の都」となるわけですね。「もって官能的なものになるかと思つたら、すごくファンキーで、ある種のバカハカしさのあるものになりましたね(笑)。でも僕はあんな人間じゃないですから、あんなにハレンチじゃないです(笑)。だからこそそこに向かっているというところがリアリティーを感じるといふところ、だからビーター・オトウールでなく、マルチェロ・マストロヤニなんです。個人的にはどちらかというとビーター・オトウールの方が好きですけどね(笑)。」



「女の都」有近真澄/3000円  
「視点」/メテア・レモラス

◆Kei-tee INTERVIEW

100%の愛は300%で返す、  
90年代型アイドルの  
ポップなパンク精神。



キヤンティV.Oと子猫のような顔した宇強いパンク・アイドルKei-tee。元クラス・バレーの本田恭之をトータル・プロデューサーに1stアルバム「頭が割れそう」をリリース。デビュー作にして9曲中7曲を彼女自身

が作詞。女の子の気持ちを辛辣に、リアルに描いた歌詞が同世代の代弁者として共感を呼びそだた。

「音楽歴は長いんですけどね。」  
「小学4年生の時に聞いた町田町蔵の『メンソウ』を聴いたのが音楽との出会いと同時にパンクとの出会い。中学でバンドを始めるんですが、その頃に『キヤンティ』や『セルタ』を見て、女の子が楽器持つのが新鮮で、ヘース始めたんです。高校に入って始めたバンドではインテイスからレコードも出しました。それで高校2年の時にスカウトされてデビューに至るんですけど。」

「ケイティさんのパンクって可愛さを残しながらのパンクですかね。」

「オリジナル・パンクって反社会的なものじゃないですか。あの頃はそれでよかったけど今は、特に日本は平和ですよ。私の言うパンクはだからこそ出てくるパンク。このままで愛してもらえないなら愛されない方がいいというううな。それは音楽に関してもそう。端を売りつけているとメンタル的に歪んじゃうから自分も自由に解放してもいいよっていう意味でのパンク。でも、もし100で愛されたら300で返すっていう。アイドル・パンクなのは、アイドル好きだし女の子だから可愛いと言われることはいいと思うから。でも全然それにこだわっていない。ロックとかアイドルとかっていうジャンル分けからも自由でいたいし色々な服着たいから、その点はアイドルって言っちゃうと楽なんです。」

写真/ハリー中西、スターズ・オン、ピクチャー・エンターテインメント



「頭が割れそう」Kei-tee  
/2800円(税別)  
/ピクチャー・エンターテインメント





日時：5月21日（土）7：00PM～場所：クラフワート  
料全：3000円（1ドリンク付）  
問：キョートー大坂 06・345・2500

◆染谷 俊 INTERVIEW  
偽りのない少年をもち続ける、染谷俊のたくらみとは？  
少年の心に拘り続けるロッカー。彼の言う自由とは社会の枠からはみ出すこと。ではなく、彼自身の中の自由を書くこと。そんな彼の生き様そのまますら取めたアルバム「2nd」『僕のたくらみ』だ。この作品について、そして振り返ら

す、純粋に突き進んでいく彼の真の姿を目の当たりに感じられるライブについて、インタビュ

すごくストレートな詞ですよ。何人か好きな詩人がいるんですけど、その人達の書く詩って、行間に血が滲んでいるように思うものがあるんです。刺が刺されて刺が刺されてその言葉が生まれていて、最後に裸になった言葉を詩人が見つけ出した、というふうな、そんな詞を自分も書きたいですね。5月には2ndアルバムのツアーが始まりますが、それに向けての準備は？  
「今回、自分もちよとピアノを弾こうかなと思ってるのと、広がり感が欲しいの



『僕のたくらみ』染谷 俊/2300円（税込）/EPIC SONY

でキーボードとかオルガンの音が欲しいなというのがありますね。オルガンの人がハンマスの人で、あともう一人キターとのアルペジオみたいな形でキーボードを入れたいと思ってるんです。それと今、生はいいモノに憧れて、自分が指揮者になれるような、合図すればパシッと止まるようなモノって生じゃないと出来ないから」



『モンシエリ・ゴゴゴ』Les 5-4-3-2-1 / 3000円（税込）/日本コロムビア

## 次

代の洋楽マニアによる、メイソンス界への進出で日本のポップス水準も随分上がった近頃。その中でも最も気になる一人が綿内克幸。全曲シングル・カット出来る程ポップ性高い曲が詰まった作品「クロックワーク・ラヴァーズ」でデビューした彼の、ネオ・アコでニュー・ソウルでロックもする1stについて

「メロディとか響きを気付けながら、歌を聴いた時にその奥にある心みたいなモノがキチンと見えるような歌い方はしていきたいですね」  
—染谷さんの書く詞って裝飾に頼らないんですけど、最終的には自分の声とメロディが全部響けてくれると確信してました。僕の中のポップ感というキーワードがあるわけですから曲がバラついていても結局何か繋がってるはずですからね。ネオアコ好きだった人達ならグッとくるフレージングがいっぱいありますね。  
「あの（ネオアコ）人達は60Sの大作曲

家をキーボードで引つ張り出してきたすよね。それで体質を感化されたというか、呼び起こされたというところはありますね。60S歌謡曲を聴いたTVっ子だった自分とかその頃に聞いた映画音楽だったりとか。バカラックだったリスティビー・ワシントンなんかのポップス精神に感銘を受けている。」「そりゃもう。キーンとさせてくれる、それ通り越してツーンとさせてくれる人は大好きですよ。ある程度のトゥーマッチは大好きですね」

## ブ

リティッシュ・ビートとフレンチ・ポップスの混血Les 5-4-3-2-1。「ミニアルバム「アン」」「ドウ」に次ぐ1stフルアルバム「モンシエリ・ゴゴゴ」完成。サリ久保田のサイケ感覚は宇宙サークルをダンスフルに描きヒトミのVOはキュート&セクシィ。ハウス感溢る新たな境地を描き出した彼ら。今回はVOヒトミにインタビュー。

「私達はハウス感と呼んでいます。ジャケットも宇宙人みたいな衣装です。映画「ハーバレー」みたいなイメージです。宇宙人といっても親しみやすい宇宙人です。モロそれをやると違う雰囲気になるので、その辺りをオフラットに包んだ宇宙でしようか」  
—ダンサブルなものを、がやはり頭にあつたんでしようか  
「新世代のヌーベル・ポップスでノリ良くゴゴゴ、の提案に、サリ久保田の持つ色が活かされています」  
—ゲンズバールの「69年はエロな年」のカバーもスベイスィですね。  
「久保田さんがゲンスフルを敬愛してるのもありますが、①「サークル・ゲーム」の詞、最終的に輪廻転生で繰り返されるというの、その意味では同じなんです。2006年に再び戻ってくるというイメージです」



## 歌謡ハウスで「ゴゴゴ」、スベイスィに宇宙ダンス

「THREEDUCKNIGHT」/DJサリ久保田・巻坂敬太郎ほか  
5月2日（日）8：00PM～3000円/OHゆれ大坂 06・348・5500

「もっ大好きですね。小さい頃からの現体験でしょうか？」  
「1stにはその辺のポップス要素が大いに出ていますよね。」  
「柔らかなモノから固いモノ迄色々な音楽をカルトに聴いたりする方ですからバラけてくるとは思っています」

## 綿内克幸INTERVIEW ポップ・マジックの玉手箱、魅惑のメロディ



『クロックワーク・ラヴァーズ』綿内克幸/3000円（税込）/ビクター・エンタテインメント



◆ピアニアンズ INTERVIEW

ただ、好きで演ってます。大阪のライブで彼らに聞く。

ピアニカの名手ピアニカ前田を中心に結成されたピアニアンズ。ギタリストに塚本功、ウツドベースには長山雄治、そして新たに元東京スカパラダイスオーケストラの朝倉弘一を迎えて活動を開始している。彼らにインタビュー。



朝倉「いえ、人間的にです(爆笑)」  
前田「(笑)」というのは冗談ですけど、彼が入って全体的に流れのいいステージになりました。今の4人がベストですね。これはピアニアンズの音楽を分析すると、前田「我々の音は攻撃的じゃないですよ。そういう意味では受け入れやすいですよ。さあ踊ろうとかいうんじゃないかって、皆がちょっと集まったから楽しもうか」と

「この4人が揃ったという経路を教えてください。」  
ピアニカ前田(以下前田)「今まで(セッション)あれやこれややってたんですけど、何かベーシックなものがやりたいたいと思いついて探したんですけど、塚本くんはその頃まだ学生だったんですけど、初めて見た時これだ!と思って

「それは音楽的な部分で...」  
朝倉「いえ、人間的にです(爆笑)」  
前田「(笑)」というのは冗談ですけど、彼が入って全体的に流れのいいステージになりました。今の4人がベストですね。これはピアニアンズの音楽を分析すると、



「そんな意味では、近ごろのアンブレグド流行りなんかどう思われますか。」  
朝倉「あれは普段でかいい音で演ってる人が、今日は生一本でもって演ってみようかってやってますよ。うちは違います。最初からこのまんまでですから」  
前田「最初からやりたかったのがこれ。そして行き着いたのがこなんですよ。」  
「今後の活動としては?」  
前田「アナログ盤を続けて3枚出してます。コンセプトですか?ありません(笑)」  
朝倉「京都でもライブ演りたいです。呼んで下さい。どこでも行きますよ」

いた彼らが3月にアルバム「ア・テイスト・オブ・ソウル・ボッサ」をリリース。その名の通り、正に様々なテイストのサウンドが織り込まれたアルバムに仕上がっている。このアルバムはプロモーションのため京都入りしたゴンザレス鈴木氏からのお願いで、世界的にも注目を集めているDJ竹村延和氏との対談が実現。ブラジル音楽やジャズへの竹村氏なりの解釈が実現されている彼のユニット「スピリチュアル・ヴァイヴス」とソウル・ボッサの共通項は見い出されるか?

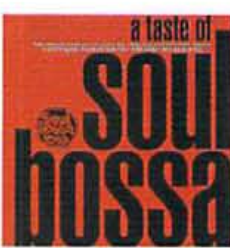
鈴木「このアルバムタイトルを見てもらったらかと想像するんだけど、僕のアイドルってやっぱりインディー・ジョージ。彼はやはり凄いよね。曲とかアレンジもそうだけど、例えばプロデュースを他人に任せると、それでもちゃんと彼の色が出るのね。それって凄いなって。竹村君のアイドルって誰?」  
竹村「プロデューサー、ブレイヤー、と色々いますけど、やっぱりジョン・コルトレーンですね」  
鈴木「ソウル・ボッサのアルバムって僕にとっての東京っていう気がしてるとは、その東京っていうのは僕の生まれてからずっと今も住んでる下北沢なんだよね。一歩外に出れば古瀬屋があったりする繁華街ですごく賑やかなんだけど、ちゃんと逃げ場があるって言うか、帰る家があるってそこに行けばほっとするっていうような。ある種の日記だと思っただけでさ、竹村君なんかそんな感じじゃない?」



◆SOUL BOSSA TRIO  
ゴンザレス鈴木 & DJ竹村 / 対談

元パノラマ・マンボ・ボーイズのメンバー、ゴンザレス鈴木を中心としたユニット「ソウル・ボッサ・トリオ」。93年の5月結成以来「JAZZIN」など数々のイベントに出演し好評を得て

「そうですね。日記というようにそこはあるかもしれま



「ア・テイスト・オブ・ソウル・ボッサ・トリオ」/3000円(税込)/ビクター・エンタテインメント

竹村「そうなんです。でも今度スピリチュアルのリミックス・アルバムを出すんですけど、それはハウス系の人にリミックスを頼んだんです。ジャズ系の人だと仕上がりが想像つくでしょう。その点どんな風にあるかわからないんで楽しみなんです」  
鈴木「へえ、面白そうだね。ところでスピリチュアルの時に竹村君は後ろの方でフルート吹いてるじゃない?あれわかるな。常にこう、冷静にバンドの動きとかノリとかを見てるでしょ」  
竹村「結構冷静です(笑)。普段でも鈴木「何か話さなくてもわかりあえてるよね(笑)。そうだ、今度は非京都で一緒にイベントしようよ」  
竹村「ええ、是非やりましょう」  
鈴木「皆さん、お楽しみに!」

取材・文/早川加奈子  
写真/武豊育子  
協力/ビクター・エンタテインメント、αステーション







**恋愛の法則**

**た** つた1日で運命が変わることがある。何気ないひとことや、ほんのわずかなすれ違いで、明日の自分は今までに考えられなかったような状況にいるかもしれない。そんな日常の“事件”が、ある男女4人に1度に起こるといふ物語である。原題は「BODIES, REST & EMOTION」、つまりニュートンの「慣性の法則」。「外力の作用を受けない限り、物体は静止、または運動を続ける」というセオリーが、登場人物たちの人生と交差する。乾いた時代を代表するアメリカの新人類。生活が苦しいわけじゃない。夢がないわけでもない。恋人だっている。でも何かが違う。じゃあ何が足りないのか？それは誰にも見えない……。転々と職を替え家を替え、目的もなく地に足のつかないニック（ティム・ロス）。彼の恋人で、男に寄り添ってしか自分の生き方も決められないベス（ブリジット・フオンダ）。ニックの元恋人、そしてベスの親友で、自立心に溢れながらもいまいち人生を楽しめないキャロル（フィビー・ケイツ）。純粋で野心のかけらもな

い、優しさだけが取り柄のシド（エリック・ストルツ）。ニックが独り気ままに全てを捨てて旅立ったことから、残されたベスとキャロルの心に不安がうずまき、そしてベスは失望の中、シドと出会う。たった1日で、4人は人生とまっすぐに向き合うハメになる。そこから各自、自分の道しるべを見つけてゆくとする。ラストは決してハッピーエンドではないのだが、でも4人がそれぞれ、新たに自分だけの人生の宿題に気づき、そしてその解決法がなんとなく道の向こうに見える。ことある。明日探しの宿題に悩むひとに見て欲しい。

●大阪/4月30日より  
 扇野ミュージアムスクエア  
 京都/6月頃  
 みなみ会館にて公開

明日が見えない恋人たちへ。乾いた世代の、人生探し。  
**— BODIES, REST & EMOTION —**

**— BACK BEAT —**

成功を手にする事のなかった、もうひとりのビートルズの生と死。



**バック・ビート**

**ジ** ヨン、ポール、ジョージ、リンゴ。今さら言うまでもない20世紀最大の伝説、ビートルズのメンバーである。彼らがまた成功を手にする以前に、我々の知るよしもないもうひとつの物語があった。イアン・ソフトリ監督・脚本のイギリス映画「バック・ビート」である。これはジョン・レノンの親友で当時ビートルズのメンバーでもあり、21歳で脳内出血のため亡くなったスチュアート・サトリフとその恋人アストリッド・キルヒヤーを描いている。ビートルズの知名度とその偉大さの影に隠れてしまい、ふたりのことは今までほとんど知られていなかった。だがこのふたりに強い興味を持った監督自身が、アストリッドをじゃかに訪ねて映画化への情熱を語ったところ、彼女はスチュアートの死後30年の沈黙を破り、彼の真



実を語ったという。1960年のリウアップール。美術学校の生徒で19歳のスチュアート、愛称スチュは、親友ジョン・レノンに誘われてロック・バンド、ビートルズに参加した。スチュには天才的な絵の才能があったが、自分の作品を売ったお金でベスを買い、音楽への興味をつのらせていく。未熟ながらも地元で着実に人気を得ていくビートルズ。そしてその頃、スチュは女流カメラマンのアストリッドと運命的な出会いを果たすのだ。ストーリーはふたりの恋愛を中心に進んでゆくがそれだけではない。ジョンとスチュの友情。互いにアーティストというところで深く結びついているからこそ生まれてくる不安とジエラシー。そして野心と音楽への情熱だけにささえられ、ひたすら夢に向かつて突き進んでいく4人の若者たちの姿が、生き生きと映し出されているのである。

●5月14日より  
 みなみ会館にて公開

MOVIE



MOVIE